

# 人権だより

No.272(2020.9)

## ひと ひと 「人と人とのつながり」

じんけんきょういくぶ いわさき ともこ  
人権教育部 岩崎 朋子

すべての始まりは、ちょうど1年前の出会い。私は人権委員の生徒とともに宇和島市最後の識字学級生のおばあさんにインタビューをさせてもらった。文字を奪われた原因が差別と関係している現実を学んだ私たちは、当事者の方との対面に、少し身構え、緊張した。しかし、おばあさんは終始、気さくに対話をしてくださり、温かい笑顔でこれまでの人生を振り返り、最後に、私たちに向けてあるメッセージをくださった。「人と人とのつながり、それが一番大事よ」と。それを聞いた時、はっとした。知らず知らずのうちに、学級生に「頑張っていてほしい」と願い、ただの応援者となっている自分に気がついた。例え差別をしていなくても、差別のある社会を変えていこうとしなければ、差別を容認したことになる。おばあさんのメッセージは、「この出会いを次につなげてほしい、違いに触れて、違いを楽しむ出会いを」と私自身バトンを託されたような気がした。この時“指導者”ではなく、“始動者”として、まずは自分が一歩を踏み出し、「差別をなくす仲間」とつながり、そして“共学者”として学び合うことを誓った。

今夏、宇和島市が主催する岡山県にある国立療養所『長島愛生園』訪問研修に生徒とともに参加させてもらった。ハンセン病について、知識はあるつもりだった。長い間世間から隔離され、離島だった長島に、入所者たちの強い要望で架けられた“邑久長島大橋”を渡ったとき、また園内の納骨堂に納められた、死んでも故郷に帰れない3040の無縁仏の遺骨があることを知ったとき、“分かったつもり”になって、何もしてこなかった自分が恥ずかしくなった。

机上で学ぶだけでなく、地域に出向き、当事者の方たちと顔を合わせ、心を通い合わせる経験が、“ひとり”ではないと感じ、“仲間”になりたい、“助けになりたい”、“共にたたかいたい”と思うきっかけになる。学級生の言葉が響く。「人と人とのつながり、それが一番大事よ」。

## 【長島愛生園を訪問して】

長島愛生園訪問研修に参加した後期生の感想です。

私はこの長島愛生園訪問研修に2つの疑問を抱いて参加しました。1つ目は、「ハンセン病とはそもそもどのような病気なのか」。2つ目は、「現在のコロナ禍の状況と比較して、私にとれる最善の行動は何か」といったものです。

事前学習や実際の訪問を通して、ハンセン病問題について、当事者や関係者の方の声とともに学びました。そのとき私は、私たちが今「当たり前」と感じている、人が人として生きる権利が、周囲の人々のハンセン病に対する偏見と嫌悪によって奪われ、負の連鎖を作り上げていったことを知り、不合理さを感じました。

私は入所者の方が作った「もういいかい 骨になるまで まあだだよ」という俳句が印象に残っています。死んで、骨になってからでないと家に帰ることができない。その後、納骨室を訪れたとき、骨になっても帰れないという現実を知り、怒りを感じました。

これらの研修を通して私は2つ目の疑問である「これからの自分の行動」について考えました。今の私たちにできることは、どんなに忌々しい過去にも目を背けず、向き合い、それら全てを次の世代に後継していくことだと思います。コロナが流行し、感染した方に対する誹謗中傷が問題になっている今、正しい知識を身に付け、自分たちのこれからの行動を見定めていくことが、今の私たちにできることなのではないかと思いました。

5年4組 善家 綾音

愛生園を訪問する前に、基礎知識として「ハンセン病」について学びましたが、実際に行かなければ感じられないことが多くありました。私が一番心に残っているのは「差別を割り切る」という言葉です。差別をされているからと絶望し、何もしないのではなく、差別を無くすために活動し、心を強く生きている姿にとても感動しました。

私たちがこれからできることは、この信じ難い事実を後世にも残すために活動することです。後世に残すにも、正しい知識でなければいけません。そのためにも、もっと詳しく勉強し、正しい知識を持っておきたいと思います。

5年4組 中川 夢佳